

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

August 2014 vol.20



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「籾内佐斗司彫刻展 いのちをむすぶ童子たち
ご縁で結ばれる—やぶ うち さと し籾内佐斗司の世界

企画展「美少女の美術史」
美少女をどう見る？ どう描く？

大正期の子ども服の調査から
愛らしい子ども服

20



唐仁原希〈秘密は話さないほうがいい〉 2013年 作家蔵

「籾内佐斗司彫刻展 いのちをむすぶ童子たち」

2014年10月4日(土)～11月17日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A.《陽子》1988年 公益財団法人ウッドワン美術館蔵

B.《犬モ歩ケバ》1989年 兵庫県立美術館蔵

C.《鱧登り童子》2011年 個人蔵

ご縁で結ばれる—籾内佐斗司の世界

近年よく耳にするフレーズではあるが、この仕事をしていると、「ご縁」というものを本当に身近に感じることがある。「人の縁」「地の縁」「物の縁」。繋がる先は様々であるが、巡り巡ってやってきた縁、という意味合いでは同じである。これがもしも目に見えたらどんなかたちをしているのだろうか。赤い糸のようなものか、それとも球形か。なんとなく受け取り方を誤ると簡単に切れたり、壊してしまいそうで危ういものでもある。

彫刻家、籾内佐斗司の仕事は、通常は目には見えない、動いたりしない、しかし確かにそこに存在するものを「かたち」にすることに源泉がある。彼の制作意図は、「鎧」「動物たち」「連続性」「童子たち」の4つのカテゴリーに分かれる。「鎧」とは、我々がもつ肉体を生命が一時まとう鎧と捉え、執着しても仕方がない「魂」の容れ物であるとする考え方に基づく。いずれは空蝉となる仮初めのかたちではあるが、それはなんとも魅力的で、目の奥でいつまでも残像が尾をひく(図A)。また「動物たち」は、生命との最初のふれあいである、幼い頃に遊んだ生きものの感触やにおいの記憶である。誰しもが持つ優しく哀しく大切だった時間。これに永遠の「連続性」をもたせることで、はじまりも終わりもない、時間の流れを定着させる(図B)。いずれ

もこの世とは空間軸の異なる世界での出来事であるが、私たちはそこにある種の懐かしさを感じ、癒やしを得る。

そして籾内作品といえはなんといっても「童子」であろう(図C)。その姿は無邪気に遊んだり、いたづらをしたりする子どもの姿であるが、正しくは人ではない。「七歳までは神のうち」という言葉のとおり、まだ「人」に属さない、神聖な子どもの姿で、古来敬われてきた大自然のエネルギーなど、目に見えない力を擬人化して表している。彼等は天界と人間界を行き来する「おに」でもあり、目に見えないだけで、本来は私たちの生活の身近なところにいる存在なのだ。

いずれも仏教的な死生観や古来、芸術や宗教が追い求めてきた、人の生のあり方といった深い思想に結びつくが、受け取る側は、それを特に深く考えたりしないでよい。籾内氏の紡ぎ出す作品群は、とにかく見ていて楽しく、面白く、幸せな気持ちになるのだ。そこにはどこか不可思議な余韻や奇っ怪さ、さらに少し未知のものを知る怖さのようなものも含まれるが、「ご縁」を大切に「かたち」にしてきた作家の愛が詰まった世界観は、大人も子どもも世代問わず広く楽しめる内容となっている。

そして、もうひとつ。本展の開催中に是非

お楽しみいただきたいのが、10月12日(日)の「きんさいデー」の日に開催する平成伎楽団公演である。平成伎楽団とは、籾内氏がプロデュースする仮面舞踏集団のことで、天平時代の仮面楽劇に用いられた「伎楽面」を籾内流にアレンジし、天平装束を着けたパフォーマーたちが舞台上を所せましと動き回り、舞い、演じる。登場するのは、奈良県マスコットキャラクター「せんたくん」の兄「鹿坊」など、親しみやすいおなじみのキャラクターたちであるが、なかには度肝を抜く巨大な大魔王の登場など、楽しい演出も予定されている。本来動かざる彫刻が、パフォーマー達の精気あふれる演技で自在に動き回る姿は圧巻である。

今回は石見だけの特別バージョンということで平成伎楽団と石見神楽とのコラボレーション公演を予定している。まさしくこcodileでしか見ることができない奇跡のコラボと言えよう。堀之内真平氏率いる平成伎楽団あめのうずめ組と、石見神楽の種神楽保存会の共演を是非お楽しみいただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)

「美少女の美術史」

2014年12月13日(土)～2015年2月16日(月)

休館日:火曜日(ただし12月24日は開館)、12月28日～1月1日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2

図1.《柳橋扇面流遊女図屏風》 17世紀(江戸時代初期) 当館蔵

図2. Mr.《Goin To A Go-go!!》 2014年 ©2014 Mr./Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

美少女をどう見る? どう描く?

企画展「美少女の美術史」は、日本の美術において「少女」がどう表現され、見られてきたかを探る試みである。とはいえ私たち企画者が「これが美少女の歴史だ」という仮説を示すわけではない。様々な時代、様式の事例を集めて、少女の姿を鑑賞することの意味や、「少女」をテーマに据えることで浮かびあがる日本文化の性質などについて、観る人と一緒に考えようというスタンスで展覧会を作った。本稿では展覧会の楽しみ方の一例として、少女の群像を描いた絵を3点とりあげ、比べながら見てみたい。

江戸時代初期には歌や踊りで客をもてなす女性を描いた「遊女図」が制作された。場面は遊興の場であることが多いが、無地の金箔の上や、架空の風景の中に描かれることもある。図1は、桃山から江戸初期に流行した「柳橋図」に遊女たちを配し、さらに様々な扇絵をコラージュしたものだ。屏風を見る者は、遊女の姿を鑑賞すると同時に、彼女たちと一緒に川面を流れるとりどりの扇絵を眺めている気分になれる。遊女たちの面長の顔かたちは、江戸初期に活躍した絵師、岩佐又兵衛のスタイルを踏襲した、いわば当時の「美少女キャラ」である。さらにこの屏風が面白いのは、川面からとぼけた顔のナマズやコイが顔を出しているところだ。記

号化されたポピュラーな主題が組み合わされた装飾過多な空間は、本展で紹介する現代作家、Mr.の作品(図2)にも通じている。

《Goin To A Go-go!!》は、4枚のパネルを組み合わせた縦259センチ、横648センチの巨大な作品で、パネルを1枚ずつ設置する現場に立ち会った私は、まるで障壁画のようだと感じた。作者は多くの下絵を描き、周到な準備を重ねてこの大作を完成させたという。現代の美少女キャラクターの様式で描かれた様々な姿態の少女たちが画面を所せましと駆け回り、その隙間を現代社会や少女文化を象徴するモチーフや文字が埋め尽くしている。よく見ると画中にはシビアなモチーフも描き込まれているが、全体としてはアイドルのステージを見ているような高揚感が感じられる。心地よい幸福感ではなく、どこか不安を感じさせるところも江戸初期の遊女図に似ている。それは世情の反映だろうか、あるいは快樂の享受に対するちょっとした警告だろうか。鑑賞の対象として理想化、様式化された美少女に、多彩なモチーフを組み合わせたさびやかで不条理な画面には、現代のポップカルチャーだけでなく、日本美術に脈々と流れてきた嗜好が表れていると見ることができる。

もう1点、現代の女性作家による少女の

群像を紹介する。唐仁原希の作品(表紙)にも、漫画に影響された大きな眼の少女たちが描かれている。画中には漫画雑誌や、パンダのイラスト入りの引越業者の段ボール、RPGゲームから引用した棺桶を引く勇者の人形など、現代のキャラクター文化を反映したモチーフがちりばめられている。しかし西洋古典絵画を思わせる明暗を強調した油彩表現は、愛らしい仮装をした美少女たちを愛玩の目で見るとを妨げ、不安げな表情の少女たちの内面へ見る者を引き込む。私のかつて少女だった者には、過去に抱いていた、そして今も引きずっている「女であることの憂鬱」を思い出させる。男性諸氏にとっては、少女という存在の底知れなさを感じさせる作品ではないだろうか。何かに怯える表情の少女は、いわゆる「萌え絵」にもよく見られるが、唐仁原をはじめ本展出品の女性作家の作品には、一方的な消費を躊躇させる毒や生々しさがある。

以上は展覧会担当者の紙上の随想だが、実際の展示も時代やジャンルの枠に縛られないものとなる。観覧する人があれこれ想像を膨らませる余白の多い展覧会になることを願っている。

(川西由里 当館主任学芸員)

愛らしい子ども服

現在、当館で来年度開催予定の「子どもとファッション」をテーマとした展覧会の準備をすすめている。子どもの装いには、なによりもまず子どもの健やかな育成を願う親等の思いが色濃く反映されている。そしてまた、そこにはそれぞれの時代の子どもをめぐる意識や価値観がリアルに反映されていると言えるだろう。

近代のヨーロッパで芽生えた子どもへの特別なまなざしは、子どもをめぐる状況を変える契機となった(これ以降、子どもの特性とその発育を考慮した子ども服が作られるようになる(図1))。一方日本は、近代以降、伝統的な子ども観を受け継ぎながらもヨーロッパの新しい思潮を受容していく。それぞれの地域で子どもの存在はどのようにとらえられてきたのだろうか。今回の展覧会では、このことを考える基軸として、子どものファッションを据えた。

日本の子どもとファッションのあり様を紹介するセクションは、明治から昭和にかけての子ども服の洋装化の過程を追える内容としたい。明治期、上層階級に限られていた洋装は、大正期に入ると一般への普及が始まる。子ども服は一旦使用されれば消耗が激しく、良い状態で残ることは稀であるが、長野県須坂の田中本家博物館に大正期の作例が所蔵されていることが分かり、調査させていただき好機を得た。

北信濃の豪商として知られる田中家に

は、同家で代々使用されてきた生活の品々がよい状態で保存されている。今回拝見したのは大正時代に田中家に生まれた二人の子どもの衣服だ。一人は十代当主田鶴の長女で大正5年生まれの子よふ、もう一人は田鶴の長男で大正8年生まれの子太郎が使用したもので、ほとんどが既製服であった。

子よふが5歳から10歳にかけて着用した女兒のものは、大正10年頃から15年頃の作例8点。夏物は麻のサッカー地やポイル地で、白、ベージュ、水色、紺、グレーの生地が用いられている。ウエストにポイントのあるデザインだが、腰回りをしめつけにくい。冬物はウール地を用い、同様にウエストをしめすぎないデザイン。三越製とわかるラベルが付された作例もある(図2)。装飾的な要素としては、黒、紺、白色の生地を用いた縁取りが袖や裾、襟元に見られた他は、生地と同系色の糸による刺繍、ベージュの絹のドレスに添えられた淡いピンク色のリボンなどであり、総じて控えめである。子よふの誕生の際に用意されたと思われる大正5年頃の乳児用のスタイや大正10年頃のエプロン等数点は、いずれも未使用か未使用に近い状態のもので、三越の値札がついたままのものもあった。白い木綿にピンクや青色の縞のものや、レースをあしらったものなどがある。

男児の服については、田中家の十一代当主となる太郎が2歳から10歳頃まで着用

した16点を拝見した。大正10年頃から昭和4年頃までに作られたもので、素材は、絹、木綿、ウール、麻。白と紺のツートンのツーピース以外は、アイボリー、ダークグリーン、グレー、焦茶、白黒のギンガムチェック等の生地で、単色遣いである。ウエスト部分はボタンで上着とパンツを留めつけるか、サスペンダーで吊るようになっている。子ども服らしい要素として、丸襟や、襟や袖口等にあしらわれた刺繍、スモック風の上着などが指摘でき、いずれの作例も女兒の服と同様にシックかつ愛らしい。

こうした品の良い子ども服のスタイルは、子どもの洋服を家庭で作ることを薦め、その作り方を載せた指南書、大正11年発行の『愛らしい子供服』にも多数の類例を見出すことができる(図3)。田中家所蔵の子ども服は当時の流行を伝えるとともに、質の高い子ども用の既製服が地方の富裕層に普及していた事実を示す作例として希少である。さらに付け加えるならば、大切に保存されてきたシミや穴の残る小さな服(とは言え、ほとんどの作例が大変よい状態で保存されている)は、その服をあつらえた親等と子どもの親密な関わりや、子を慈しむ親の想いを伝えてもいる。来年度の展示では、そうした子どもの着た服の持つ独特の存在感も感じてもらえれば嬉しい。

(南目美輝 当館専門学芸員)



図1



図2

図1. mfn「ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード」より《午前の服装》1914年 当館蔵

図2. 三越製 女兒用子ども服(部分) 1921(大正10)年頃 田中本家博物館蔵

図3. 西村光恵著「愛らしい子供服」表紙(部分) 1922(大正11)年 当館蔵



図3